

わが心の自叙伝

菅原洋一

▷21

シルヴィアと筆者



ールデンが亡くなったことから、日本でも人気が高かった懐かしい映画「慕情」の主題歌を歌い、さらに翌年はシャンソンの名作「愛の讃歌」を「紅白」で歌った。長く歌い継いできた歌をいま一度「紅白」の舞台で披露できることが正直うれしかったものだ。

ヒット曲だけを追い求めなくともよい歌手人生はなかなか心地よかつた。ところがヒット曲を追い続けなくなると、面白いものでヒット曲の方からこちらに寄ってきてくれるものらしい。

当時の私はテレビ、ラジオより、ホテルのディナーショーやラウンジショーなどで歌う機会が多かつた。その「ホテル」をテーマにしたアルバムを作ることになったのである。

そのレコーディングの最中、スタジオで「これはどうしても女性とデュエットで歌った方がいい」と思う作品があつた。そ

の場にいた事務所の小澤社長に話すと、「じゃ、シルヴィアを呼ぼうか？」ということになった。シルヴィアはロス・インディオスと共に「別れても好きな人」や「それぞれの原宿」などをヒットさせていた同じ事務所、レコード会社の後輩歌手である。社長が電話を入れ、夜も遅かつたがシルヴィアはレコーディングスタジオを訪ねてくれた。「アルバム曲だから気軽に……」と一、二度さらって歌を吹き込んだ。

そのアルバムはその年の「レコード大賞」企画賞に選ばれ、なんとシルヴィアと歌つた「アマン」はシングルカットされたのだ。これが翌年に向け、カラオケのデュエットソングの定番曲としてヒットしたのだ。

83年の「紅白」で私はシルヴィアと久々のヒット曲を引っ提げて出場することになったのである。(すがわら・よういち「歌手

ヒット曲だけを追いかけて、本当に歌いたい歌を歌っていない……と考え始めたのは1980(昭和55)年のことだつた。年末近くになると今年のレコード大賞は誰に?や「紅白歌合戦」出場者予想が新聞や週刊誌にぎわせる。まるで競馬の予想のよう(○(当確)、○(有力)、△(スレスレ)などと書かれ、それに一喜一憂することもあつた。

このままで本当にいいのだろうか? まだ「紅白」のメンバー発表前だったが、私は卒業の考えがあることをマスコミに話した。流行歌手にとってヒット曲は必要不可欠な要素だ。それを分かつた上で「紅白」を断念、卒業したい、と。

その後の予想表では私にはそろって×(不出場)印が並んだ。ちよつとすがすがしい気分だつた。ところがそれを聞きつけた

「アマン」

NHKから待った!がかつたのである。

うれしいことに主婦層に圧倒的人気があることや出場者中唯一のポピュラー畑の歌手であることを説明された。さらにその年はアルゼンチンタンゴが生まれて100年の記念の年で、タ

ンゴが静かなブームだつたことから私の原点である「ラ・クン

パルシート」を原語で歌つてほしいと依頼されたのだ。本当に歌いたい歌を「紅白」で歌える。私は卒業を撤回し、喜んで出場させていただくことにした。翌年は俳優のウィリアム・ホ

気軽に歌って久々のヒット